

学位論文題名

スピノザ形而上学研究

— 個性の問題を軸として —

学位論文内容の要旨

本論文は、「序論」、「第Ⅰ部実体一元論」、「第Ⅱ部個性の政治学」、「第Ⅲ部人間精神」、「引用文献表」により構成され、A4版、横書き、全190ページ(400字詰め原稿用紙換算約550枚)である。

本論文の意図は、17世紀オランダの哲学者スピノザの形而上学と政治思想、すなわち「神」と「国家」と「精神」をめぐる思索(広義の形而上学)を対象とし、第Ⅰ部では実体すなわち神の存在証明と本質について、第Ⅱ部では国家観について、そして第Ⅲ部では人間精神の永遠性について、従来の解釈史における主要な論争点を整理・検討した上で、それらをいずれも「個性」という観点から統一的に読み解くところにある。

「第Ⅰ部実体一元論」では、主にスピノザの主著『エチカ』第1部「神について」における「各々が永遠・無限の本質を表現する無限に多くの属性からなる実体」としての「神」という概念が検討される。この「実体」及び「神」の概念については、伝統的に認められてきた個別的で有限な存在者への実体概念の適用が拒否される、あるいはすべての実体を「自己原因」として「多くの神」を作り上げてしまうのではないかといった問題が指摘されてきた。この問題に対して柏葉氏は、自己原因である実体は無限であり、この「唯一の属性をもつ実体」から、これらを属性として構成されるのが「無限に多くの属性をもつ実体」すなわち神である、とするゲルーの標準的な発生的解釈を批判的に検討し、神の「唯一性」を、数的区別における数多性の否定としての唯一性ではない唯一性、他のものと「交換不可能である」という意味での唯一性、すなわち「絶対的単独性」と解釈し、無限実体は本性上不可分であるのだから、その属性の数が可分的であってはならず、したがって実体がもちうる属性は無限に多くなければならない、とすることによって、実体すなわち神に関する新たな理解への道を切り拓いている。

「第Ⅱ部個性の政治学」の主題はスピノザの政治理論である。国家を一つの「個性」とみなすスピノザの政治理論に関しては、従来「暗喩的解釈」と「個性論的解釈」とが対立してきたが、本論文は、スピノザの自由意志否定論と自由主義的な政治思想の結合の可能性や、倫理学と政治学の緊密な内的連関を論ずることによって、スピノザは文字通り国家を一つの「個性」として把握しながら、同時に自由主義的国家観を表明しているということが明らかにされる。

さらに「第Ⅲ部人間精神」では、「人間精神は、身体とともに完全に破壊されえない。むしろ、そのうちのあるものは永遠なものとして残る」という『エチカ』第 5 部の記述を手がかりに、果たしてスピノザは、魂の不死を信じていたのか、そうでなければ、精神の永遠性とは何を意味するのか、という問いを取り扱う。精神の永遠性に関するスピノザの議論を、精神の自己同一性を失わせるものとして徹底的に批判したのはライプニッツであったが、これに対して本論文は、具体的個別的な人間の自己同一性を保証するのは、スピノザにおいては、各人の現実的本質であるコナトゥスであり、これが各人における永遠・無限なモメントをなすこと、人間精神には自己の身体を永遠の相の下で表現する観念が与えられており、この永遠な部分がなければもの一般を永遠の相の下で認識することは不可能であること、そして精神の永遠性とは「全時間性」ではなく「無時間性」として理解されなければならない、と主張することによって、まさにこの生において私が自らの精神の永遠性を認識することによって、私の精神が「この私」の永遠性になりうる、と結論づけている。

これらにより、本論文は、スピノザ形而上学の主題である神・国家・人間精神のいずれもが「個性性」という観点から統一的に解釈できるとする。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 新 田 孝 彦
副 査 教 授 花 井 一 典
副 査 准教授 蔵 田 伸 雄

学 位 論 文 題 名

スピノザ形而上学研究

－ 個 体 性 の 問 題 を 軸 と し て －

本審査委員会は、上記申請論文を審査するに当たり、スピノザの「神」と「国家」と「精神」をめぐる思索（広義の形而上学）を「個性」という統一的な観点から読み解こうとする意図がどれだけ説得的に論証されているか、またそのスピノザ解釈が長い研究史をもつスピノザ研究の中でどのような貢献をなすのかという点に焦点を当てて検討した。本研究が対象とするスピノザの神・国家・人間精神のいずれに関しても、それを「個体」として把握する解釈に対しては有力な批判が存在しており、そうした解釈史を十分に踏まえた上で自らの立論を展開することが、この種の研究の価値を定めることになるからである。本審査委員会は前後四回の委員会と口述試験を通じて、この点の確認に努めた。

「第Ⅰ部実体一元論」では、実体すなわち神というスピノザの実体一元論をどのように理解するかという問題に関して、現在多くの解釈者によって標準的と認められているゲルマンの発生的解釈に対して、柏葉氏は、他の代表的な解釈をも視野に入れつつ、属性に関する客観的・実在的解釈をとり、かつ「唯一性」についてはこれを数的な「一つ」としてではなく、「絶対的単独性」という意味で理解することによって、スピノザは実体（すなわち神）を「個体」として捉えていた、という解釈を提示している。審査委員会は、この解釈を、現在流布している諸解釈に対する有力な代替案であると認めた。

「第Ⅱ部個性の政治学」では、「国家」を一つの「個体」とみなしつつ、同時に自由主義的な国家観を支持するスピノザの政治理論をどのように整合的に解釈するか、また理論哲学においては強固な自由意志否定論者であるスピノザがいかにして政治哲学において自由主義者でありうるかという問題が検討されている。柏葉氏は、第一に、自由意志なるものは「思い込み」にすぎないが、この思い込みこそが国家成立のための必要条件であること、思い込みに基づく国家体制が維持されるためには、それは各人の理性的な判断に基礎を置かなければならず、それゆえ国家においては国民の自由が保障されなければならないということをきわめて説得的に提示している。審査委員会は、国家に関しても個体論的な解釈が妥当することを確認した。

「第三部人間精神」の問題は、スピノザにおいて精神の永遠性とは何を意味するのかということである。精神の永遠性を魂の不死と捉えることによってスピノザを批判したのはライプニッツであるが、柏葉氏はこの大哲学者の批判に対して、そもそも精神の永遠性は「全時間性」としてではなく「無時間性」として理解されなければならない、「個性性」である「この私」が「私の精神の永遠性」を認識するという点にこそ、精神の永遠性の眼目がある、なぜなら「私だけが私の精神の永遠性に向き合えるのだから」と結論している。審査委員会は、精神の永遠性をもつはずの実践的意義に関する議論が不足しているものの、この無時間性的解釈は、今後のスピノザ研究に一つの新しい方向性を与えるものであることを確認した。